第 37 回

福井県発掘調査報告会資料

－　令和 3 年度に発掘調査された遺跡　－

２０２２

福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

（表紙写真　沖布目北遺跡遠景）

目　　次

1　沖布目北遺跡（おきぬのめきたいせき）・・・・・・・・・・・・2

2　舟寄正堺遺跡（ふなよせしょうざかいいせき）・・・・・・・・・・6

3　寄安・栗森遺跡（よりやす　くりもりいせき）・・・・・・・・・8

4　六呂瀬山古墳群（ろくろせやまこふんぐん）・・・・・・・・・10

5　袋田遺跡（ふくろだいせき）・・・・・・・・・・・・・・・12

6　袋田遺跡（ふくろだいせき）・・・・・・・・・・・・・・・16

7　波寄三宅田遺跡（なみよせみやけだいせき）・・・・・・・・・18

8　河増遺跡（こうますいせき）・・・・・・・・・・・・・・・20

9　一乗谷朝倉氏遺跡（いちじょうだにあさくらしいせき）（第 154 次）
・・・・・・・・・・・・・・・・・・22

10　福井城跡（ふくいじょうあと）・・・・・・・・・・・・・・・・・26

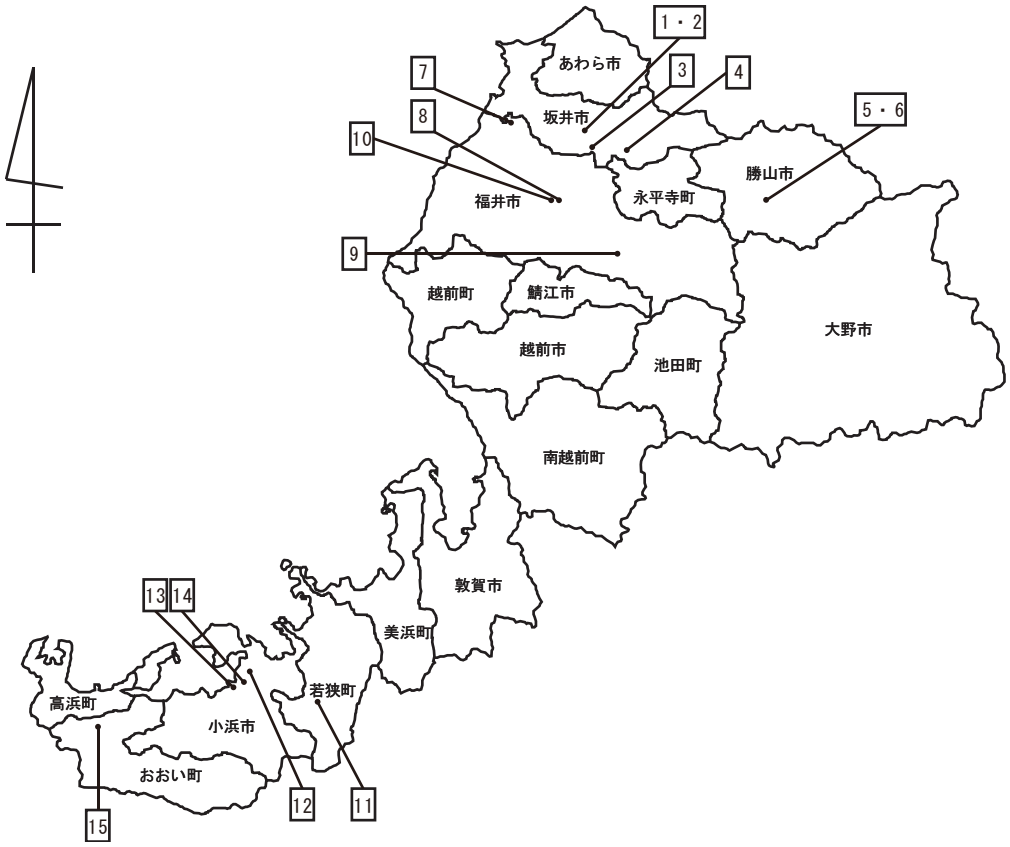
11　西塚古墳（にしづかこふん）・・・・・・・・・・・・・・・・・28

12　羽賀寺（はがじ）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30

13　後瀬山城跡（のちせやまじょうあと）（8次）・・・・・・・・・・・32

14　小浜城跡（おばまじょうあと）・・・・・・・・・・・・・・・・・34

15　石山城跡（いしやまじょうあと）・・・・・・・・・・・・・・・・36



令和３年度県内発掘調査地点（目次番号と同じ）

1　沖布目北遺跡（おきぬのめきたいせき）

所 在 地：坂井市春江町沖布目

調査原因：主要地方道丸岡川西線福井港丸岡
　　インター連絡道路改良工事

調査期間：令和３年５月～12 月

調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

調査面積：6,430 ㎡

時　　代：縄文時代中・後・晩期、弥生時代中期

位置図（S=1/50,000）

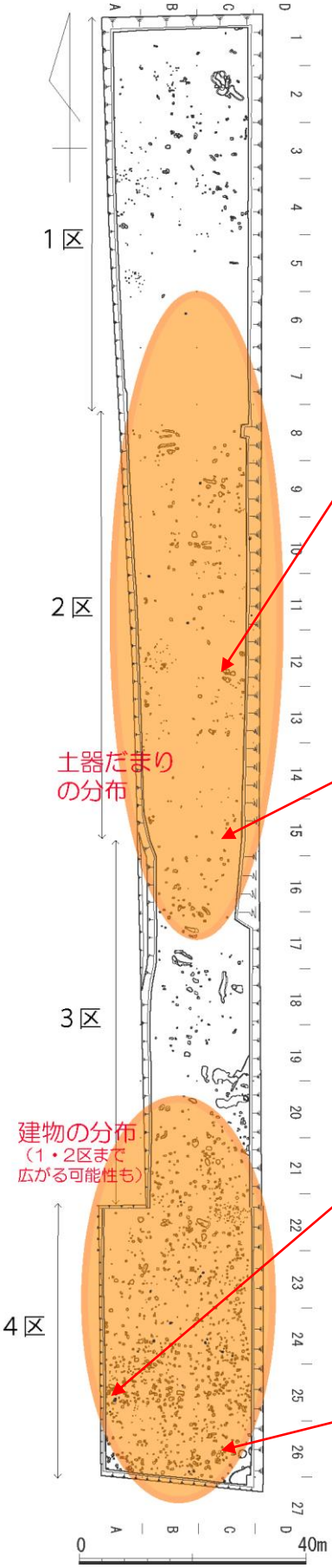
遺跡について　遺跡は坂井平野を北西に流れる兵庫川の左岸に位置します。坂井平野は、九頭竜川・竹田川・兵庫川などの河川によって形成された沖積平野であり、遺跡は沖積平野の旧微高地から低地にかけて立地しています。発掘調査は北から順に１区から４区に区割りして実施し、北にいくほど基盤層が低くなります。調査区では、現・旧耕作土の下に縄文時代の遺物包含層（ほうがんそう）（厚さ 40～80cm）を確認しました。また、基盤層上および遺物包含層上の２面で遺構の検出を行い、縄文時代の建物や埋設（まいせつ）土器、土坑（どこう）、土器だまりなどの遺構を検出しました。遺物包含層からは、縄文時代の多量の土器や石器が出土したほか、４区では弥生時代の遺物包含層も確認しています。

主な遺構　発掘調査の結果、縄文時代の建物５棟以上、埋設土器 28 基、土器だまり約 60 基、河川などを確認しました。竪穴建物や炉を確認することはできませんでしたが、環状にめぐる柱穴列（ちゅうけつ）を３・４区で複数確認したため、建物群の存在を推定しています。また、埋設土器はこれらの建物や柱穴に近接しており、底部穿孔（ていぶせんこう）して埋設される例が多いです。これらの遺構が３・４区の旧微高地で検出される一方で、１～３区の低地帯では土器だまりを多く検出しています。土器だまりの土器は、小破片の土器が密集して出土していることから、当時の廃棄状態を示しているといえるでしょう。以上の遺構は、縄文時代後期前半を中心とする時期です。

主な遺物　遺物は縄文土器・弥生土器（弥生中期）・石器（打製（だせい）・磨製（ませいせきふ）石斧、石錘（せきすい）、磨石（すりいし）、石皿（いしざら）など）・木製品（柱・加工木など）・土製耳飾りが出土しました。縄文土器は中期後葉～後期中葉、晩期の時期があり、後期前半のものが多いです。（松本泰典）

遺跡遠景（北西から）

４区遠景（北東から）



土器だまり（土器を捨てた状態）

小型鉢（赤い顔料を塗っています）

埋設土器（土器底に穴をあけて埋めます）

建物遺構（長さおよそ４ｍあります）

柱穴群（複数の円形建物プラン）

埋設土器

土器だまりの検出作業

柱穴埋土断面

縄文土器（縄文中・後・晩期）

土製耳飾り（縄文後期）

磨製石斧（縄文中・後期）

打製石包丁（弥生中期）

2 舟寄正堺遺跡

所 在 地：坂井市丸岡町長崎・舟寄

調査原因：主要地方道丸岡川西線福井港丸岡インター連絡道路改良工事

調査期間：令和３年９月～12 月

調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

調査面積：4,160 ㎡(1 区 2,430 ㎡、2 区 1,730 ㎡)

時　　代：弥生・古墳時代

位置図（S=1/50,000）

遺跡について　坂井平野のほぼ中央、兵庫川左岸に位置する弥生時代後期から古墳時代前期の集落遺跡です。市道の東側を１区、西側を２区として、舟寄正堺遺跡では初めてとなる調査を行いました。

主な遺構　１区では、溝 27 条、土坑14 基、柱穴または小穴 335 基などを検出しました。１区の東端から西端までを１条の溝が横断しており、この溝の南側で３棟、北側で１棟の掘立柱建物を確認しました。掘立柱建物は２間×１間のものが３棟、２間×２間のものが１棟です。このほか、特筆すべき遺構として土坑 11 と柱穴 254 があげられます。土坑 11 は長辺約 1.4m、深さ約 0.5m を測る２段掘りの土坑で、底部で横倒しになった甕１個体が見つかりました。また、柱穴 254 は長辺約 0.3m、深さ約 0.3m を測る柱穴で、上層で壺が正位にて出土しました。口縁部を欠いていますが胴部は本来の形を保っており、何らかの儀礼に伴うものの可能性が考えられます。

２区では、土坑２基、小穴 21 基のほか、兵庫川の支流と考えられる自然流路とそれに平行する溝３条などを確認することができました。調査区北側を東西方向に流れる自然流路は、土器の出土状況などから集落域が形成される頃には流路の半分程度は埋没していた可能性があり、調査区外の北方に湿地が広がっていたと想定されます。

主な遺物　弥生土器、土師器、石器などが出土しました。弥生時代後期から古墳時代前期の土器が主体ですが、弥生時代中期の土器も見つかっています。また、石器は、石鏃・打製石斧・磨製石斧・叩き石・磨石・凹石・錐・砥石など多岐にわたり、緑色凝灰岩片１点や、安山岩の剥片なども出土しました。　（藤本聡子）

１・２区　全景（西から）

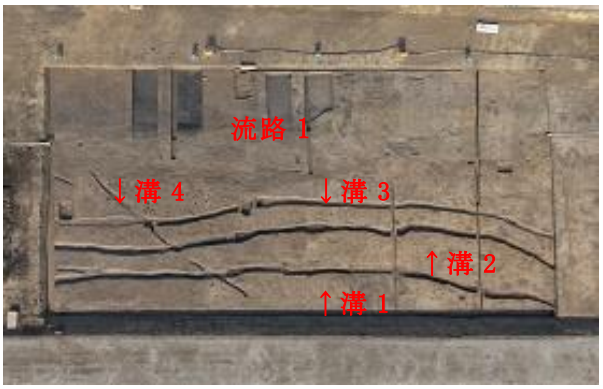
１区　全景（南から）

１区　掘立柱建物１（南から）

１区　掘立柱建物２（南から）

１区　土坑 11 遺物出土状況（東から）

１区　柱穴 254 遺物出土状況（南東から）



２区　全景（南から）

２区 流路遺物出土状況（東から）

3　寄安（よりやす）・栗森（くりもりいせき）遺跡

所 在 地：坂井市春江町寄安

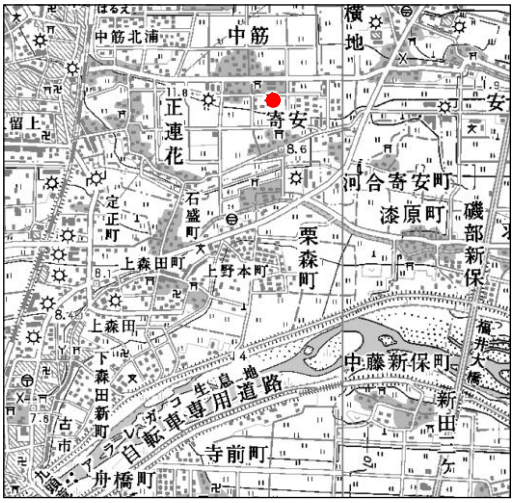
調査原因：一般県道福井森田丸岡線道路改良事業

調査期間：令和３年５月～６月

調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

調査面積：100 ㎡

時　　代：弥生時代後期～中世、近世



位置図（S=1/50,000）

遺跡について　寄安・栗森遺跡は、福井平野中央部にあり、遺跡の範囲は、坂井市春江町寄安から福井市栗森町まで広がっています。今回の調査箇所は、その北東部にあたります。平成 26 年度の北陸新幹線建設に伴う調査では、福井市と坂井市の市境付近で旧河川が確認され、付近には小字「芳ノ川（よしのがわ）」が地名として残っています。このことから、今回の調査地は、磯部川と「芳ノ川」に挟まれた位置であったと考えられます。

本年度の調査地の地名は、小字「古屋敷（ふるやしき）」であり、真宗道場が開かれていたという伝承が残っている場所です。調査地西方には市指定史跡「黄楊堂（つげのどう）」があり、この場所には親鸞上人が逗留（とうりゅう）したと伝えられています。また、調査箇所付近を北陸道が通過し、往時には多くの人々が行き交っていた場所であったと想定できます。

寄安・栗森遺跡は、県埋蔵文化財調査センター（以下、県埋文と略す）や福井市教育委員会により、過去に何度も調査が行われています。主に弥生時代後期から古墳時代前期の集落や水田、鎌倉時代から江戸時代の集落などが確認されています。

一方で、近年（平成 28 年、令和元年度）に県埋文が実施した本年度調査区と隣接する箇所の調査では、これまでの調査とは違い、遺構が密集して確認できました。鎌倉時代から室町時代の区画溝を伴う掘立柱（ほったてばしら）建物群や井戸などがみつかっており（図１）、長期間におよぶ屋敷地が存在したことが明らかになりました。出土遺物は、越前焼や土師質（はじしつ）皿、漆器椀（しっきわん）、箸（はし）など日常的に使用するものが主体的でしたが、宝篋印塔（ほうきょういんとう）や五輪塔（ごりんとう）も出土し、一部を墓域として使用してのかもしれません。

主な遺構・遺物　平成 28 年度に調査した屋敷地の南方は、低地であり、湿潤な土地でした。今回の調査でも同様な地形を確認できたため、低地部の埋没時期を確認しました。その結果、この低地は、弥生時代後期以降に埋まり始め、屋敷地が営まれていた時期(13 世紀後半から 15 世紀前半)には、植物を多く含む黒色の粘土層が認められ、池沼化(ちしょうか)していたことが分かりました。この堆積層からは越前焼や土師質皿を主体として、青磁(せいじ)・瀬戸美濃焼(せとみのやき)・石製バンドコなども出土しています（写真３）。出土した土器は、摩滅していないことから、近くから流れ込んだものと考えられます。また、時期を決めることができませんでしたが、植物を含む黒色の粘土層を切って構築された柱穴(ちゅうけつ)５基、土坑(どこう)２基もみつかりました。　（三原翔吾）

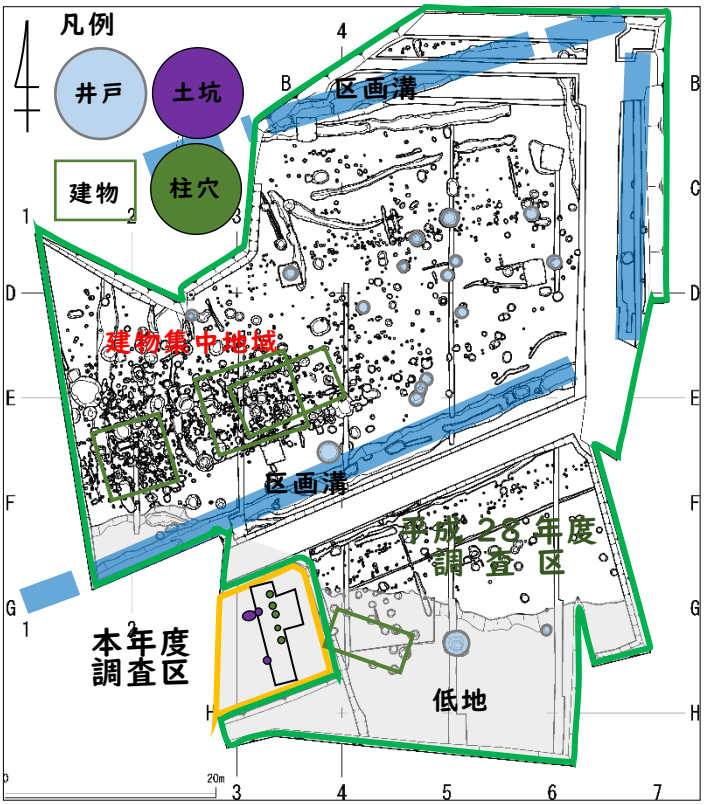


図１　令和３年度・平成 28 年度調査区全体図

写真１　低地の土層堆積

写真２　礎板の残る柱穴

写真３　出土遺物

４　六呂瀬山古墳群（ろくろせやまこふんぐん）

所 在 地：坂井市丸岡町上久米田

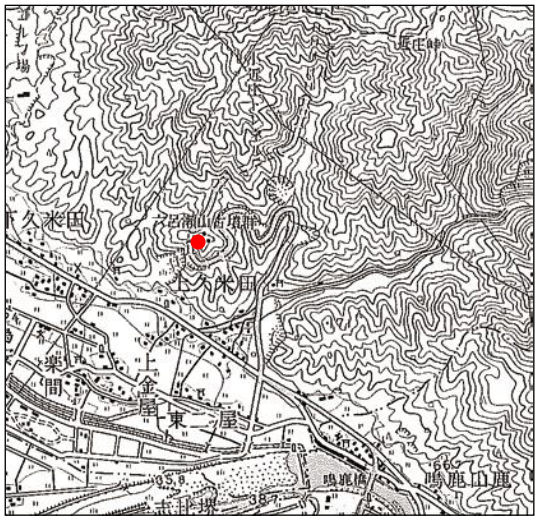
調査原因：史跡整備に向けた範囲確認

調査期間：令和３年 10 月

調査主体：坂井市教育委員会

調査面積：35.6 ㎡

時　　代：古墳時代



位置図（S=1/50,000）

遺跡について　六呂瀬山古墳群は、北陸最大級とされる全長約 140ｍの規模をもつ１号墳（前方後円墳）を含む４基で構成される前期古墳群です。古墳時代の越前地域を知るうえで、重要な遺跡と評価され、平成２年に国指定史跡となりました。

主な遺構　調査対象である六呂瀬山１号墳は、標高約 200ｍの山頂に立地しており、自然の尾根を利用して築造されています。今回調査を実施した前方部では、２段築成のテラスが良好に確認でき、墳頂平坦面では３本の埴輪（はにわ）列が確認できました。また、墳丘斜面では 10～15 ㎝大の河原石と思われる葺石（ふきいし）、30 ㎝大の基底石（きていせき）も確認できました。

主な遺物　本調査で出土した主な遺物は円筒（えんとう）埴輪です。墳頂平坦面に散布した状態で出土し、口縁部や胴部といったものが多く見つかりました。底部も確認できますが、第一段突帯から底部までの高さが分かるものは今のところ確認できません。一部ですが、朝顔形（あさがおがた）埴輪の肩部ではないかと思われる破片も見つかりました。　（小林美土里）

埴輪検出状況（東より）

前方部　完掘写真（南より）

5　袋田遺跡（ふくろだいせき）

所 在 地：勝山市芳野町２丁目 1032 番２

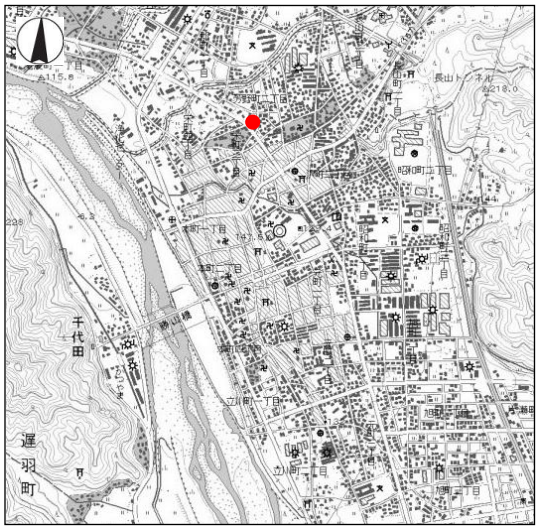
調査原因：物販店舗の建設

調査期間：令和３年８月

調査主体：勝山市教育委員会

調査面積：141.8 ㎡

時　　代：古墳時代



位置図（S=1/50,000）

遺跡について　袋田遺跡は、平成 30 年（2018）に分布調査を実施し、勝山市役所を中心に北は芳野町２丁目、南が立川１丁目までの広い範囲で縄文時代から江戸時代の土器などが見つかったことにより新規登録されました。遺跡は、平成 31 年（2019)、文化庁が認定する「日本遺産」の構成文化財に登録された「七里壁（しちりかべ）」沿いに分布し、九頭竜川の右岸の河岸段丘面に立地します。本調査は、勝山市教育委員会による２回目の調査事例となり、市域では調査事例が少ない古墳時代の集落跡が見つかったことから、貴重な発見となりました。調査地は、北に浄土寺川が流れる段丘面にあたることから、洪水などの被害がない安定した地理的環境に集落が形成されていたと考えられます。また、勝山市域の同時代の竪穴住居跡はこれまでに九頭竜川左岸の本郷北遺跡(鹿谷町)で見つかっているだけですが、住居の構造を比較するとよく似ています。

主な遺構　店舗建設に伴う基礎工事の工事立会を実施中に発見しました。検出した遺構は、竪穴住居１棟だけでした。周囲に遺構が分布していないか範囲を広げて確認しましたが、発見には至りませんでした。竪穴住居は隅丸方形を呈し、１辺は 6.5m、残存する深さは約 0.2mを測ります。住居内の遺構は、柱穴２基、小穴６基です。

竪穴住居跡の全景（西から）

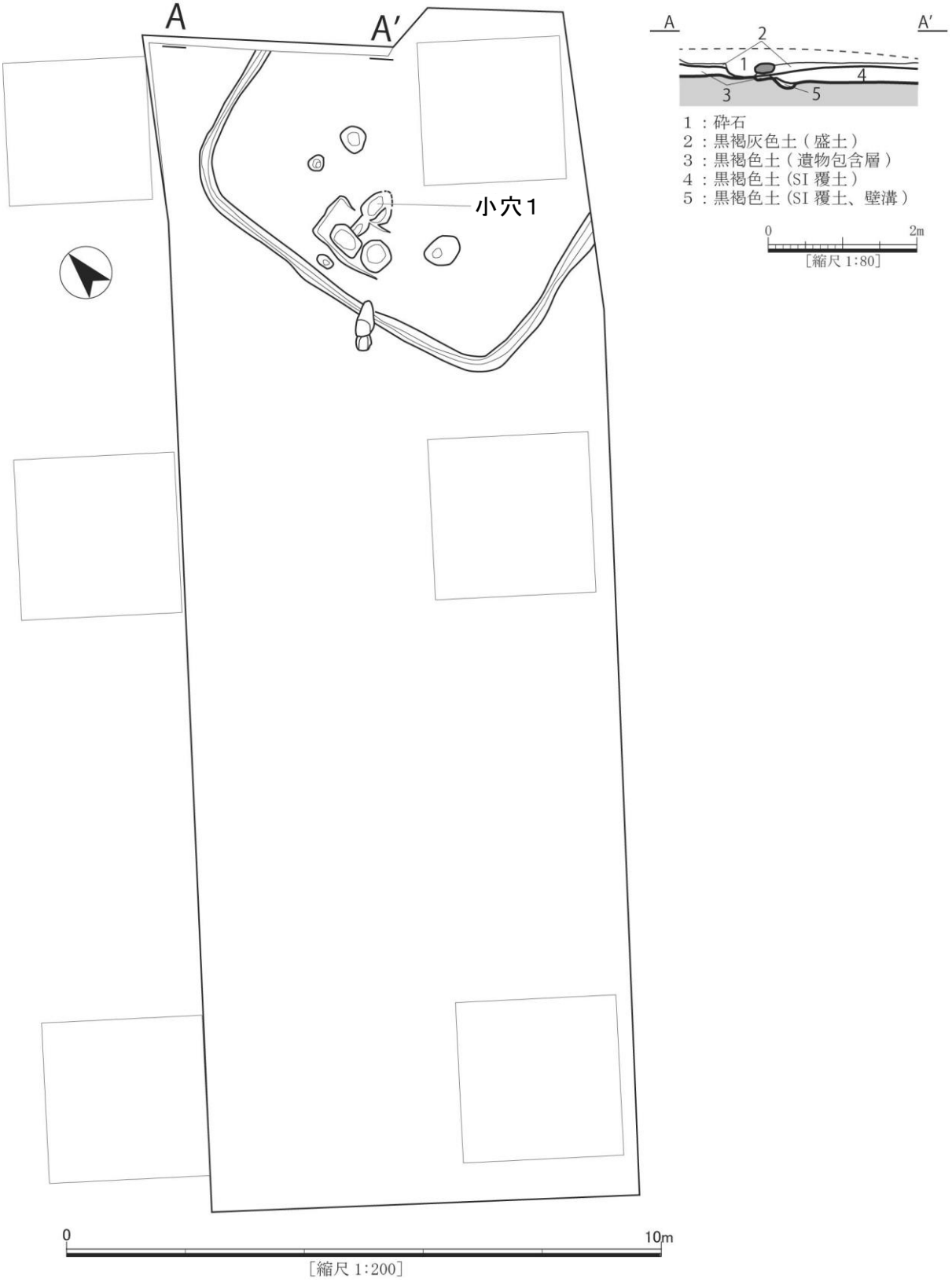
主な遺物　出土量はコンテナ箱数でいうと２箱程度です。遺物包含層（ほうがんそう）からは土器が数点出土したのみで、ほとんどは竪穴住居が埋没した際に埋まった土の中からの出土です。時期は古墳時代初期で、器種は、甕・壺・高坏・鉢形土器が見つかっています。貯蔵穴と想定される小穴１からは、一面に赤く塗られた小型壺が横たわり、つぶれた状態で見つかりました。この赤く塗られた小型壺は、市内で初めての出土事例です。この小型壺は、内面を薄く削りあげた後に丁寧になでています。また、底付近の内面は、使用頻度が高いことを物語るのか、とても摩耗していました。（藤本康司）

赤彩された小型壺（小穴１出土）

調査地の全景（東から）

竪穴住居跡の土層断面（西から）

竪穴住居跡の角　近景（北から）



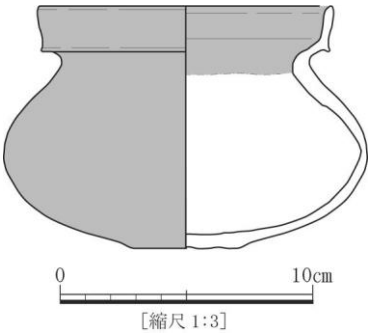
第１図　調査地の平面図と竪穴住居跡の土層断面図

貯蔵穴と考えられる小穴群（西から）

小型壺の出土状況【小穴１】（南から）

甕形土器の口縁部【竪穴住居跡より出土】

高坏形土器【竪穴住居跡より出土】



第２図　小型壺の実測図

第１表　小型壺の観察表

遺跡名	出土地点	種　類	器　種	口　径	底　径	高　さ	焼　成	胎　土	備　考
袋田遺跡	A-1 **小穴1**上・下層	土師質	小型壺	11.6cm	4.2cm	9.6cm	良好	精良	赤色塗布（外面～内面の頸部） 内面底面は使用状況によるのか摩耗

６　袋田遺跡（ふくろだいせき）

所 在 地：勝山市本町２・３丁目

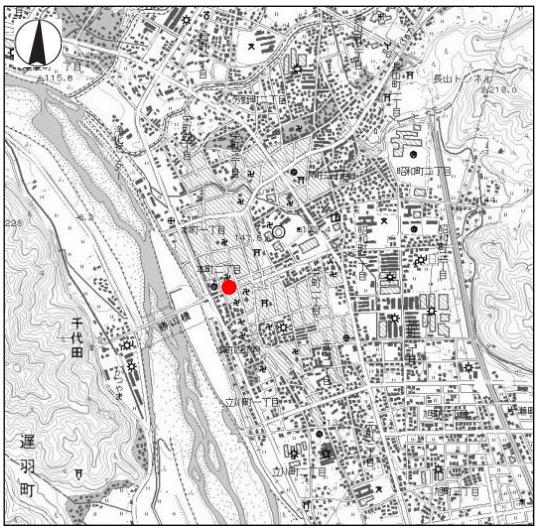
調査原因：一級河川大蓮寺川改修事業

調査期間：令和３年４月～７月

調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

調査面積：430 ㎡（５区 200 ㎡、６区 230 ㎡）

時　　代：弥生・古墳時代・古代・中世・近世



位置図（S=1/50,000）

遺跡について　九頭竜川右岸の河岸段丘上に所在する複合遺跡です。令和元年度より調査を行っており、令和３年度は元禄線開通直前まで現地に存続していた慶恵寺（けいえいじ）跡から河原町通りまでが調査範囲です。調査では、慶恵寺に伴うとみられる井戸、石積遺構、石組溝のほか、近世を通じて城下町の境界を成していたと考えられる段丘崖などがみつかりました。特に、袋田村の比定地で室町時代の鍛冶（かじ）関連遺構が確認された意義は非常に大きく、地域の歴史を解明する上で貴重な発見となりました。

主な遺構　５区では２つの生活面を確認しました。中近世の生活面では石組井戸３基、石積遺構２基のほか、15～16 世紀の鍛冶関連遺構を検出しました。鍛冶関連遺構は工房と考えられる掘り込みと排滓（はいさい）坑１基で、掘り込みの周囲には東西５基、南北４基の柱穴（ちゅうけつ）が並び、床面には炉の基礎と考えられる堆積がみられました。工房に近接する排滓坑からは多数の椀形滓が出土しました。なお、平泉寺賢聖院（けんしょういん）院領目録には袋田村から鍬１挺が租税として納められたとの記載があり、今回検出された遺構との関連が注目されます。また、古代以前の生活面では、竪穴住居１棟を確認しました。

６区では、慶恵寺の敷地境を表すとみられる石組溝や、石積遺構２基などを検出しました。石組溝の約６～７m西側では、元禄 16（１７０３）年絵図に描かれている尊光寺裏の段丘崖に合致すると考えられる落ち込みを確認しました。

主な遺物　かわらけや青磁（せいじ）・染付（そめつけ）・唐津（からつ）・瀬戸美濃（せとみの）・越前焼など中近世の陶磁器が大半ですが、平安時代の須恵器（すえき）や古墳時代の土師器（はじき）、弥生土器もわずかに出土しました。また多数の鉄滓（てっさい）、金属製品、笏谷石製品（しゃくだにいし）や角閃石（かくせんいし）もみられました。（藤本聡子）

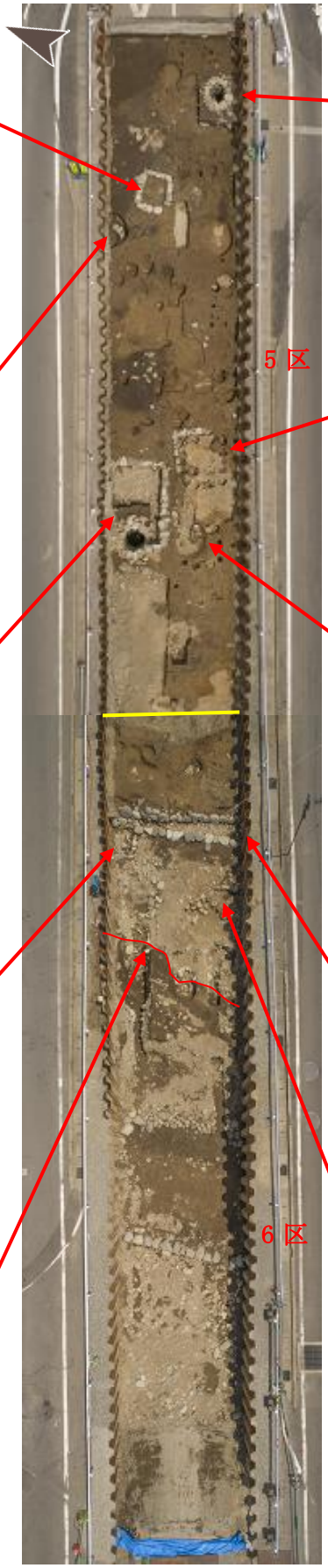
５区　石積遺構２（南から）

５区　石組井戸３（北から）

５区　石積遺構１・石組井戸１
（北から）

６区　石積遺構２（北から）

６区　段丘崖完掘状況
（北から）



５区　石組井戸２（南から）

５区　鍛冶関連遺構（南から）

５区　排滓坑（南から）

６区　石組溝（南から）

６区　石積遺構１（西から）

7　波寄三宅田遺跡（なみよせみやけだいせき）

所 在 地：福井市波寄町

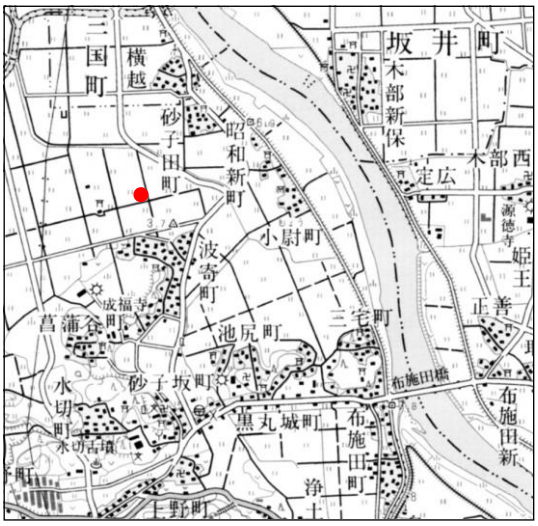
調査原因：一般国道 416 号道路改良工事

調査期間：令和３年 11 月～12 月

調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

調査面積：670 ㎡

時　　代：弥生時代・古代・中世



位置図(S=1/50,000)

遺跡について　遺跡は福井市波寄町集落の北側、九頭竜川左岸の氾濫原（はんらんげん）に展開します。波寄三宅田遺跡では、平成 22・23 年度にも今回と同様に国道 416 号道路改良工事に伴って発掘調査を行ったことがあり、多くの遺構・遺物を確認しています。今回の発掘調査の位置は、過去に行った調査区の西端部にあたり、国道 416 号を挟んだ南北２か所（北側：１区・南側：２区）です。調査の結果、過去の調査区と連続して集落が西側にも展開していることが判明しました。

主な遺構　遺構は、掘立柱（ほったてばしら）建物２棟、井戸４基、土坑（どこう）１基、柱穴（ちゅうけつ）や小穴を多数、溝多数を確認しました。掘立柱建物は、１区では４基の柱穴が直線上にならび、建物の一部を構成します。２区では１棟分の建物を確認しました。これら建物の時期は弥生時代後期から古墳時代前期と考えています。井戸は各区で２基ずつあります。１区の井戸は直径約２ｍの円形で、埋め戻された様子がうかがえました。２区の井戸はいびつな方形でしたが、規模や土層、湧水もあることから井戸と考えました。これら井戸の時期は１区の２基が弥生時代後期から古墳時代前期、２区の２基は中世の可能性があります。土坑は、２区で１基確認したのみで、時期は明確ではありません。多数の柱穴や小穴は異なる時期のものが混在するようです。溝は幅が狭く、深さも浅いもので、時期は特定できませんが耕作に関係がありそうです。

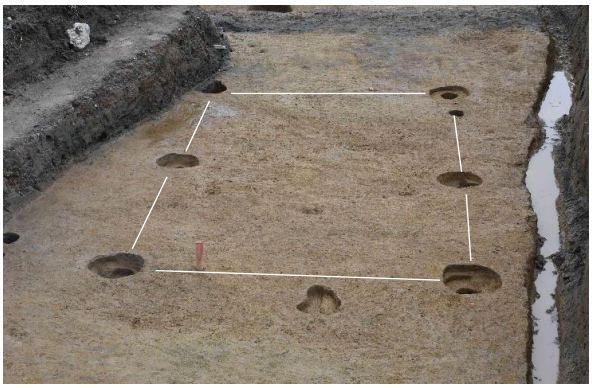
主な遺物　弥生時代から古墳時代の土器、古代の須恵器（すえき）、中世の素焼きの皿・越前焼などが出土しましたが、出土量は大変少なく、そのほとんどが小片でした。

（野路昌嗣）

遺跡近景（西から）

１区　掘立柱建物（東から）

１区　掘立柱建物の柱穴断面（北東から）



２区　掘立柱建物（東から）

１区　井戸（北から）

8　河増遺跡（こうますいせき）

所 在 地：福井市河増町

調査原因：土地区画整理事業

調査期間：令和４年１月～３月

調査主体：福井市教育委員会

調査面積：350 ㎡

時　　代：室町時代

位置図（S=1/50,000）

遺跡について　河増遺跡は、福井市河増町・東今泉町に位置し、古墳時代(約 1,500 年前)から平安時代(約 1,300 年前)の集落跡として知られています。平成２年度に通称“さくら通り”延伸に伴って実施した市教育委員会の発掘調査では、平安時代の掘立柱建物跡等を確認しています。今回の調査は、平成２年度の調査地より南側で、荒川に近い部分になります。

主な遺構　調査は 11 カ所の調査区を設けて実施しました（図１参照）。遺構を検出した深さは、調査地の北側（４～９区）で水田面より約 50 ㎝下です。南側（１～３・10・11 区）では約 90 ㎝下に遺構面が認められ、荒川に向かって低くなっています。

遺構は、調査地北側で井戸や柱穴（ちゅうけつ）が多く認められます。井戸は直径約 2m、深さは遺構面より 1.5mで底になります。井戸枠に桶や曲物（まげもの）を設けているものは２基のみで、他は素掘りで井戸枠はありませんでした。また、井戸枠の桶等は直径 0.4～0.5mと小さく、井戸としては小規模なものでした。柱穴は直径 20 ㎝、深さ 30 ㎝程度の小型のものが多く、中心に直径 10 ㎝程度の柱の痕跡が残るものもあります。柱穴で大きいものは一辺 40 ㎝の方形のものが並び建物の痕跡と考えられますが、その規模は不明です。地形の低い部分では、柱穴や井戸等の生活に密接する遺構は希薄で、10 区では畑の耕作跡と考えられる畝（うね）状の高まりが連続しています。

遺物は、中世と考えられる土師質（はじしつ）の皿や越前焼の甕、すり鉢などが出土しました。

まとめ　今回の調査では、調査地の北側に集落、南側は畑などの耕作地として使用していたことが判明し、当時の集落の形成の一端を確認できました。　（三澤繁忠）

写真１　井戸検出（４区）

写真２　井戸枠

写真２　畝跡検出（10 区）

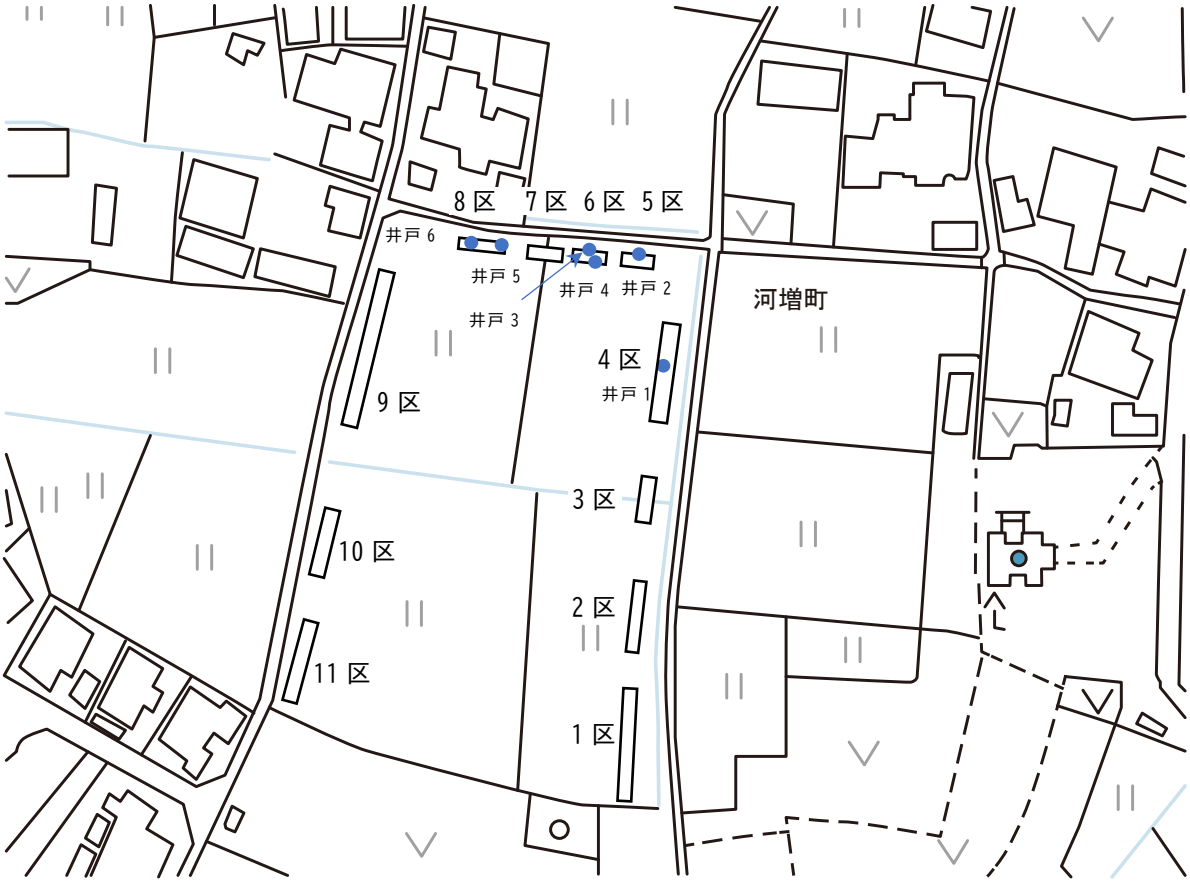


図１　調査区位置図と井戸の場所
●は井戸発見場所

９　一乗谷朝倉氏遺跡（第 154 次）

所 在 地：福井市城戸ノ内町

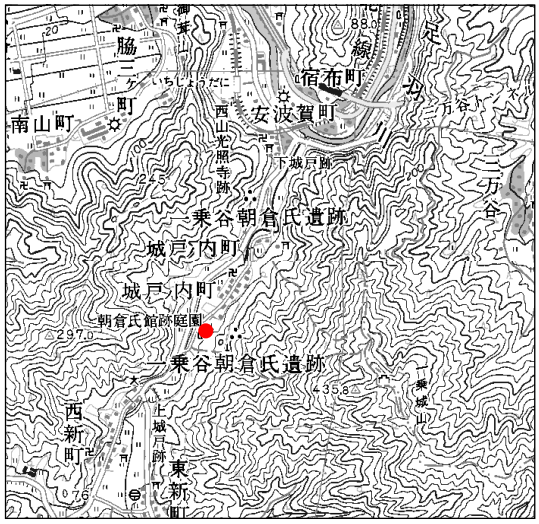
調査原因：環境整備に伴う事前調査

調査期間：令和３年９月～11 月

調査主体：福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

調査面積：22 ㎡

時　　代：戦国時代



位置図（S=1/50,000）

遺跡について　一乗谷朝倉氏遺跡は昭和 42 年に調査がはじまり、昭和 46 年に国の特別史跡に指定されました。以来、数多くの調査を重ね、令和３年の調査は第 154 次調査となりました。

今回の調査は、朝倉館跡北濠（きたほり）の崩落箇所について整備工事を行う前に戦国時代の遺構を確認し、今後の環境整備の基礎資料とする目的で調査を行いました。北濠を南北に横断する形でトレンチを設定し、掘削を行いました。調査箇所は第９次調査地点と第 67 次調査地点の中間に位置します（図１）。第 67 次調査では朝倉氏館北門の下（北濠の南側斜面）に石垣が確認されています。このような施設が延伸している可能性を考慮して調査を行いました。

主な遺構　濠の北斜面側は、一度園路として盛土されていますが、その下に近現代に構築されたコンクリート混じりのアゼが確認できました。その直下に戦国時代の整地層が確認できました。この高さから下には戦国時代の石垣が残存していることが判明しました。石垣は大型の石材が垂直に近い形で積み上げられており、最も大きな石材は横幅が１ｍを超える大きさがありました（写真１）。濠底まで掘削できませんでしたので正確な高さは不明です。第 9・67 次調査ともに北側斜面では石垣が確認されていません。第９次調査では濠内から転落石が多数出土したため、環境整備工事では復元的に石垣が整備されていますが、今回検出できた戦国期の石垣とは傾斜も積み方も異なります。今後の環境整備においてはこの石垣を参考に整備を行う必要があります。第 67 次調査で石垣が確認されていた南側斜面には石垣を確認できませんでした。

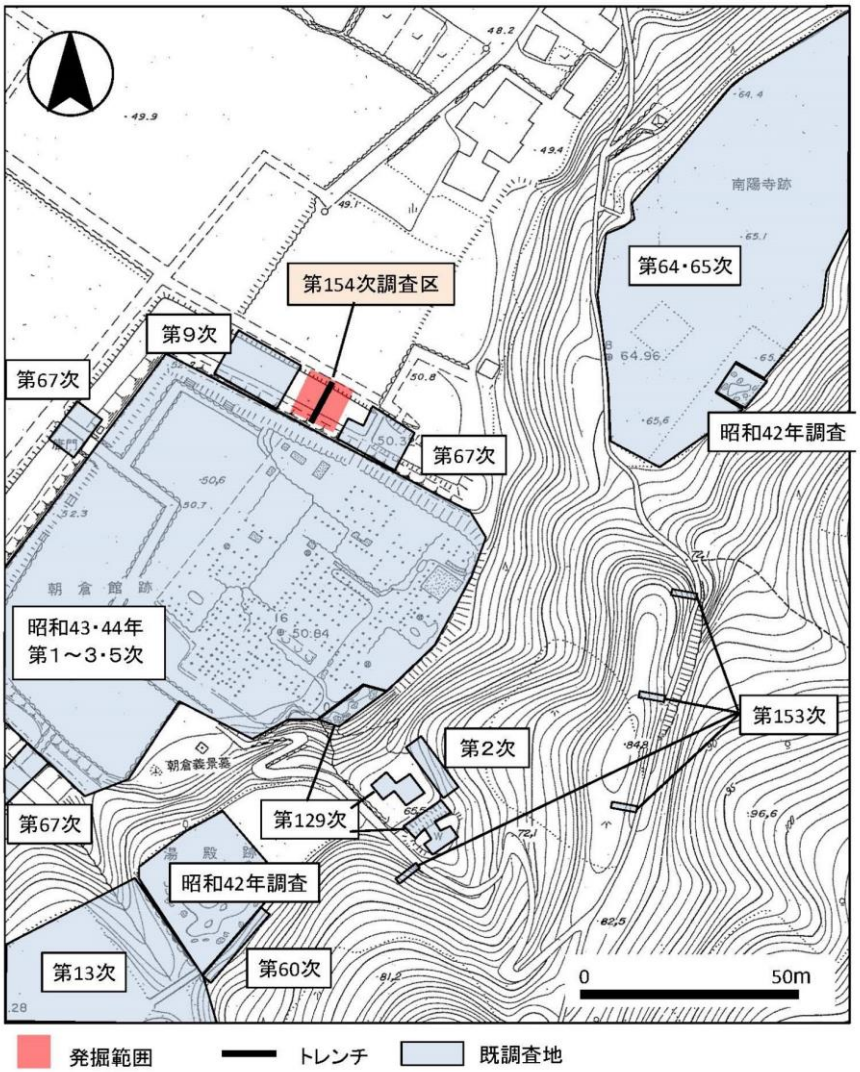


図１　第 154 次調査区位置図

写真１　第 154 次調査区全景（南より）

濠内部の土の堆積は掘りかえされた様子がなく、戦国時代に館が使用されていた期間においても徐々に埋まっていった様子が観察できました（写真２）。壁面の中央より下、黒く見える層位が戦国時代の堆積土になります。この上層が、館が焼け落ちた時期の層位と考えられます。炭化した木材、焼けた石なども出土しています。黒色層位の中央より下では、建築材加工の際に出た端材（はざい）が大量に出土しています。館の建物増築に伴うものと考えられ、その時期が今後の検討課題となっています。

主な遺物　濠内からは、館で使用された後、廃棄された品々が多数出土しています。土器・陶磁器では圧倒的にかわらけの出土量が多くなっています。かわらけは非常にきれいな状態で出土しており、饗宴（きょうえん）で盃（さかずき）として使用されたあと一度きりで打ち捨てられたものである様子がよくわかります。陶磁器は青磁（せいじ）や染付（そめつけ）といった輸入陶磁器が出土していますが、破片ばかりでした。

もっとも出土量が多いのは木製品でした。折敷（おしき）や曲げ物（写真３）、箸（はし）や漆器椀（しっきわん）など食器や食膳具（しょくぜんぐ）、下駄（げた）（写真４）などの木製品のほか、建築加工時の端材などが出土しています。端材は一部鑑定の結果、ケヤキであることが判明しています。

この他には、牡蠣（かき）などの貝殻、骨、種子など動植物の残滓（ざんし）も出土しました。

木製品や動植物残滓は鑑定も含め、多角的な分析を行いその実態を解明していく必要があります。

足利義昭を迎えるなど、幾多の饗宴が行われた朝倉館跡は、わずかな発掘面積にもかかわらず、その豊富な出土品から当時の繁栄ぶりがうかがえます。

一乗谷朝倉氏遺跡資料館は、令和４年 10 月に「一乗谷朝倉氏遺跡博物館」として開館いたします。遺跡のゲートウェイとして、また遺跡の理解をより深められる博物館となるように努めてまいります。今回の発掘場所である朝倉館、遺跡と博物館で両方見学してみませんか？それが可能な博物館です。　　（宮崎　認）

写真２　濠内の堆積の様子（西より）

写真３　小型曲げ物と板材

写真４　下駄

10 福井城跡（ふくいじょうあと）

所 在 地：福井市中央１丁目４番街区

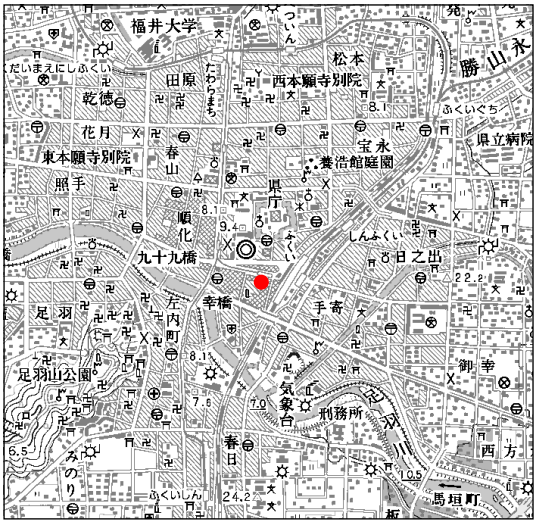
調査原因：市街地再開発事業

調査期間：令和３年５月～７月

調査主体：福井市教育委員会

調査面積：73 ㎡

時　　代：江戸時代



位置図（S=1/50,000）

遺跡について　福井城は、徳川家康の次男である結城秀康（ゆうきひでやす）が越前に入国した慶長６（1601）年から６年の歳月をかけて築いた約２km 四方の平城です。

調査は福井駅西口で、通称“三角地帯”において行いました。この場所は、福井城絵図と対照すると、百間堀（ひゃっけんぼり）西岸の「南三の丸」に想定されます（図１参照）。

主な遺構　発掘調査は、中央１－341 号線(別名“歴史の道”)より西を対象として、地下施設がない３ヵ所で武家屋敷跡、調査地に隣接する歩道で堀石垣の調査を実施しました（図２参照）。

武家屋敷跡の調査では、地面から 2.5m下まで調査を行いましたが、近代の建物基礎等により江戸時代の遺構面は失われていることが判明しました。

堀石垣は、調査地１（勝木書店跡地）に隣接する歩道において、地表下 2.0mで堀石垣の裏を充填している拳大の笏谷石（しゃくだにいし）を確認しました。検出状況からすると、堀石垣は勝木書店境から更に約２～3.0m南の歩道内に位置すると考えられます。また、ユアーズホテル跡地の南・北側歩道部において、地表下 2.2mで２段以上積まれた堀石垣を確認しました。石垣石材は笏谷石製で、大きさは幅 0.5×奥行 0.7×厚さ 0.4m程度を測ります。

まとめ　今回の調査では、近代建物の影響により江戸時代の武家屋敷の痕跡は確認できませんでしたが、歩道において堀石垣を検出したことで、これまで不明であった「百間堀」および「南三の丸」の範囲を正確に把握することができました。

（三澤繁忠）

図１　福井城比定図

写真１　調査地遠景（ハピリンから）

写真２　調査地遠景（福井西武から）

写真３　調査状況

図２　調査地全体平面図

11 西塚古墳（にしづかこふん）

所 在 地：若狭町脇袋

調査原因：史跡整備にともなう範囲確認調査

調査期間：令和３年６月～８月

調査主体：若狭町歴史文化課

調査面積：150 ㎡

時　　代：古墳時代

位置図（S=1/50,000）

遺跡について　西塚古墳は、古墳時代中期後半に築かれた全長 74mの前方後円墳です。脇袋には、西塚古墳以外にも上ノ塚古墳・中塚古墳・糠塚（ぬかづか）古墳の前方後円墳が築かれており、これらの古墳は古墳時代中期における首長墓と考えられています。また、脇袋に所在する４基を総称して脇袋古墳群と呼んでいます。

西塚古墳の史跡整備のために、昨年度から継続して範囲確認調査を実施しました。今回の調査からは、西側のくびれ部付近から木製品が出土し、水を制御するために設置されたと考えられる堰（せき）状遺構の一部を検出しました。

主な遺構　前方部南東隅から堰状遺構の一部を検出しました。堰状遺構は周濠底に丸太材を設置したのちに、その丸太材を軸として地山由来の粘土を用いて土手状に覆って作られています。その後、堰状遺構の高さに揃えながら、基底石を設置して葺石（ふきいし）を葺き始めています。

脇袋の地形は、東側から西側に傾斜する緩斜面であり、周濠内に水を湛えさせるためには、水を堰き止める必要があります。この遺構は、周濠内で水を制御していたことを裏付ける遺構と考えられます。

主な遺物　西側のくびれ部付近から木製品が集中して出土しました。古墳築造後に執り行われた葬送儀礼用の木製品と考えられ、儀礼後に周濠底に捨て置かれた状態で出土したと考えられます。鋤・板状木製品・棒状木製品の計９点を確認しています。これらの木製品の発見は、若狭地方の首長墓における葬送儀礼の一端を窺い知ることができる貴重な例です。

（近藤　匠）

西塚古墳　全景（上が北）

堰状遺構（②調査区）

埴輪出土状況（③調査区）

木製品出土状況（③調査区）

12 羽賀寺（はがじ）

所 在 地：小浜市羽賀

調査原因：通常砂防工事代谷川（徳蔵坊川）

調査期間：令和３年５月～10 月

調査主体：福井県埋蔵文化財調査センター

調査面積：1,930 ㎡

時　　代：中世

位置図（S=1/50,000）

遺跡について　羽賀寺は小浜市の中央部、天ヶ城（てんがじょう）山の谷の中にある寺院です。霊亀（れいき）２（716）年の開基と伝わる古刹で、中世には、時の天皇や有力な武家の庇護（ひご）を受けて栄えていたことが知られています。この羽賀寺の一角で、通常砂防工事代谷川（徳蔵坊谷川）に伴い、令和２・３年度に発掘調査を行うこととなりました。

図１をみると、本堂が建っているのは谷の底の平坦な場所であることが分かります。同じような平坦面は、本堂から開山堂（かいざんどう）にかけて、開山堂の北側の谷、参道の両脇にもあり、谷底の白丸の範囲に雛壇（ひなだん）状に平坦面が並んでいる様子が分かります。実は、江戸時代の初めに作られた絵図に、谷の中に建物が建ち並んでいる様子が描かれており、今に残る平坦面は、その名残と考えられています。

調査範囲には、谷底に３段、谷の斜面に複数の小さな平坦面がありました。令和２年度には下段と中段の調査を行い、石列や砂利敷きなどを確認しました。令和３年度の発掘調査では上の平坦面と斜面の平坦面が調査対象となりました。

主な遺構　谷の底では、土を盛って作った平坦面が確認できました。この平坦面の一番奥には土留め状の石列が見つかりました。また、これと直交する方向には石列と石組み溝が、並行する向きに石列と砂利敷きがあったので、もしかすると、平坦面の中を四角く区画して、その外側に砂利を敷いていたのかもしれません。

谷の斜面では、地面を直接削って平坦面をいくつも作っている様子が分かりました。

主な遺物　見つかったのは、素焼きの皿、黒くいぶした火鉢（ひばち）、越前焼のすり鉢・甕（かめ）、青磁碗（せいじわん）などで、14～15 世紀のものが中心です。　（吉田悠歩）

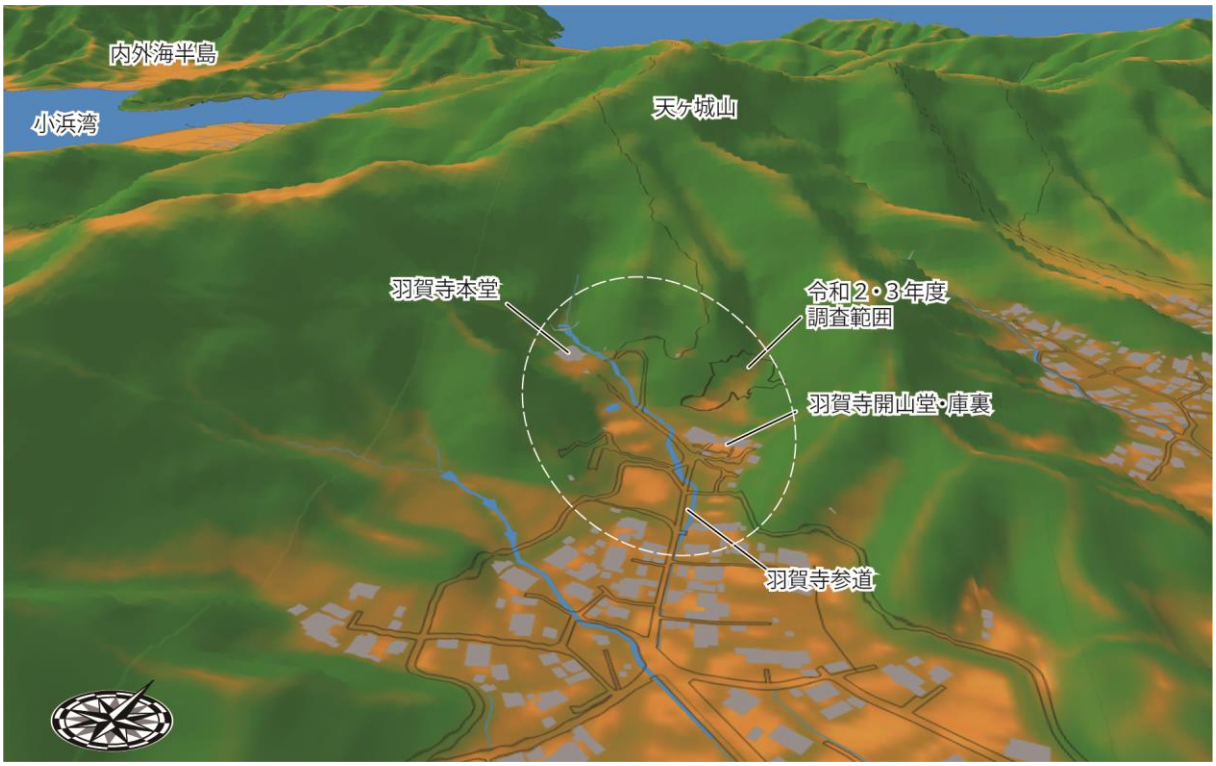


図１　羽賀寺鳥瞰図（国土地理院発行基盤地図情報及び DEM を用いて作画）

写真１　調査区全景

写真２　谷底の平坦面の石列・砂利敷き

写真３　土留め状の石列

写真４　遺物出土状況

13 後瀬山城跡（８次）

所 在 地：小浜市小浜男山他

調査原因：史跡整備に伴う確認調査

調査期間：令和３年７月～10 月

調査主体：小浜市

調査面積：150 ㎡

時　　代：室町～江戸時代

位置図（S=1/50,000）

遺跡について　後瀬山城は大永２（1522）年若狭守護職武田元光により築かれ、後瀬山上に城郭を、麓に守護館を設けました。当城は若狭国主の城郭として慶長６（１６０１）年の京極高次による小浜城の築城により廃城となるまで若狭武田氏・丹羽氏・浅野氏・木下氏の歴代国主の城として存続しました。当該城跡は、平成９年に史跡に指定され、その後平成 28 年守護館跡が追加指定を受けました。なお、本格的な調査は今回で８回目になります。

主な遺構　今回の調査は、守護館跡の北側を画する堀跡と、東側に存在が想定される門遺構の確認を目的に実施しました。北側堀跡は、地盤の砂の上に直接基底石を据え、その上に石を積んでいることが確認されました。石は７～８段分を確認しており、本来はあと１～２石分積まれていたと想定しています。堀の堆積土は粘土となっていることから常時滞水していたと考えられます。実際明治４年小浜町図にも堀が描かれており、その後埋められ道路に変わったことがわかっています。門遺構は長方形の石材をコの字状に据え、その中に黄色系の土を入れています。この長方形石材は青みがかっており、福井市の足羽山で産出される笏谷石を用いていたと考えています。笏谷石が若狭に入って来るのは江戸時代になってからと考えられることから、小浜藩主酒井家に関わる施設（空印寺）の門遺構と想定しています。なお、一部で下層遺構も確認しており、中世まで遡る遺物が確認されていることから、今後の調査で詳細が明らかになるかもしれません。

主な遺物　今回の調査では江戸時代の陶磁器、瓦が多く出土しましたが、過去の調査では、室町時代の陶磁器、土師質（はじしつ）土器、瓦質土器、金属製品、石製品、土製品などが確認されています。（西島伸彦）

後瀬山城跡（守護館跡）航空写真

後瀬山城跡（守護館跡）北側堀跡

後瀬山城跡（守護館跡）門遺構

14 小浜城跡（おばまじょうあと）

所 在 地：小浜市城内１丁目

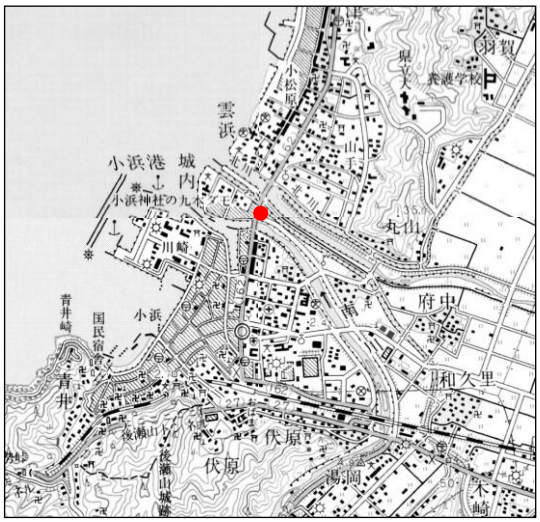
調査原因：一般国道 162 号道路改良事業

調査期間：令和３年５月～６月

調査主体：福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

調査面積：Ⅰ区 90 ㎡　　Ⅱ区 140 ㎡

時　　代：江戸時代



位置図（S=1/50,000）

遺跡について　小浜城は、北川・多田川と南川の河口に挟まれた三角洲に築かれた江戸時代の城です。慶長５(1600)年の関ヶ原の合戦後、小浜藩初代藩主である京極高次（きょうごくたかつぐ）によって、後瀬山城（のちせやま）から雲浜（うんぴん）の地に、拠点が移され築城を開始しました。小浜城は京極氏の時代には完成しませんでしたが、京極氏の後に小浜藩主となった酒井忠勝（さかいただかつ）によって完成しました。

江戸時代後期の小浜城絵図によると、調査した場所は三ノ丸に該当し、米蔵（こめくら）等の建物が描かれています。これまでの調査では、蔵の基礎の石垣と出入口となる張出しや蔵の造営によって破壊された石垣、三ノ丸石垣、大手門（おおてもん）遺構などを確認しました。

主な遺構　令和３年度の調査区は２箇所に分かれており、それぞれⅠ区、Ⅱ区としました。Ⅰ区は、小浜城絵図によると、本丸の堀の内部に該当します。調査の結果、小浜城跡に伴う遺構は確認できませんでしたが、近代の石列を確認しました。Ⅱ区は、小浜城絵図によると、三ノ丸に該当しており、三ノ丸には米蔵や役所等の建物が描かれています。調査の結果、米蔵基壇（こめくらきだん）に伴う石垣と蔵の出入り口と思われる張出しを確認しました。２列の石垣の間は、米蔵が存在していた空間ですが、建物に伴う礎石（そせき）は確認できませんでした。南北石垣の間は約８ｍを測ります。

小浜城絵図によると、米蔵基壇は「六番蔵」に該当します。張出しはＬ字状を呈しています。南側の張出しは「六番蔵」に、西側の張出しは「七番蔵」に該当します。いずれも酒井家によって造られたものと考えています。

主な遺物　江戸時代のものが大半で、瓦と陶磁器が出土しました。　　（中島啓太）

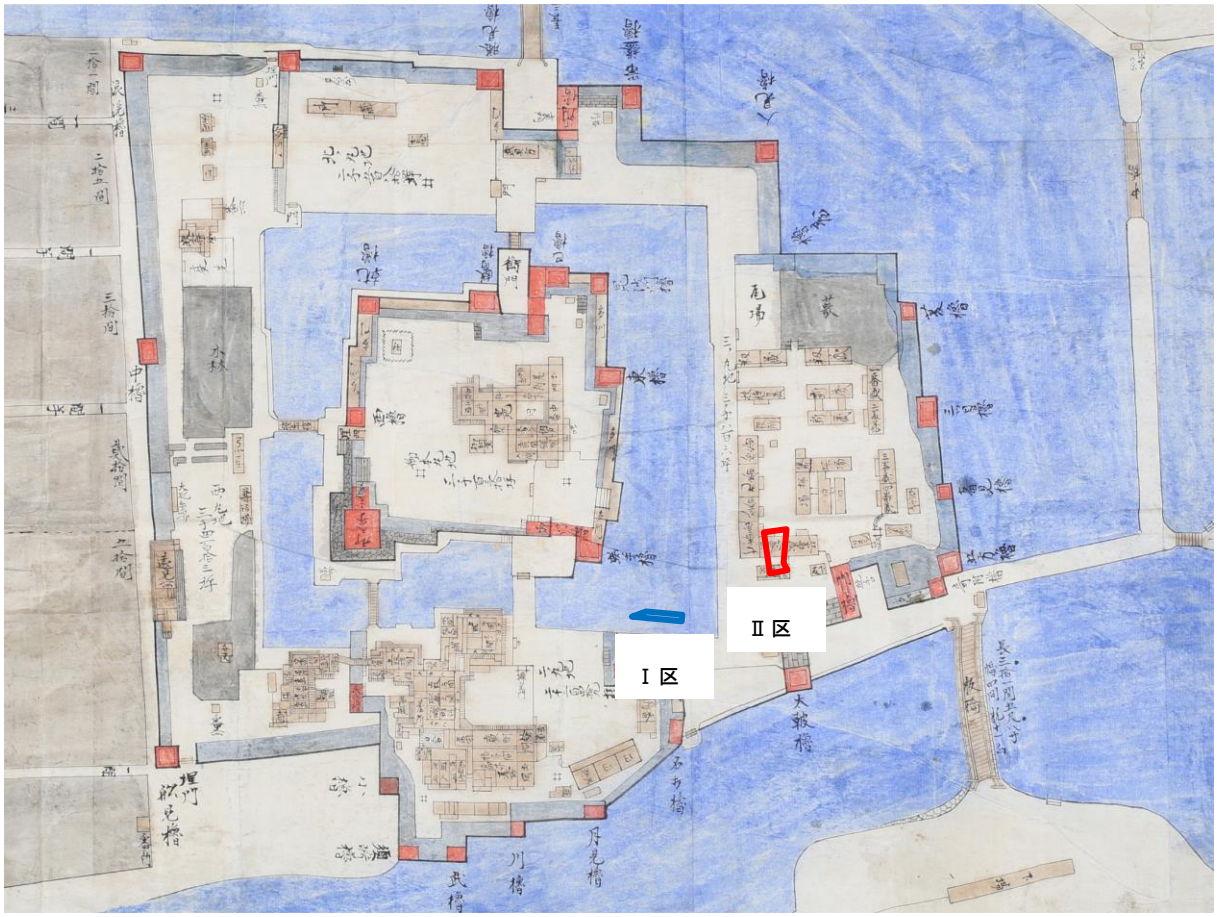


図１　小浜城絵図（部分）【福井県立若狭歴史博物館所蔵】

写真１　Ⅰ区全景（東より）

写真２　Ⅱ区全景（北より）

写真３　Ⅱ区六番蔵南側石垣

15 石山城跡（いしやまじょうあと）

所 在 地：大飯郡おおい町石山

調査原因：範囲確認調査

調査期間：令和３年４月～令和４年３月

調査主体：おおい町教育委員会

調査面積：450 ㎡

時　　代：中世

位置図（S=1/50,000）

遺跡について　石山城跡は、石山集落背後の標高 190mの山上に展開する山城です。主郭からは佐分利（さぶり）川上・中流域一帯を一望でき、県道小浜綾部線と県道坂本高浜線が交差し、この地域を支配するうえで重要な場所に城が築かれています。本城を居城とし、佐分利一帯を治めていたのは若狭武田氏家臣である武藤（むとう）氏でした。本調査は石山城跡の保存活用と将来的な整備の可能性を探ることを目的とし、令和３年度で３年目の調査となります。令和３年度は、令和２年度に引き続き遺跡の範囲確認と、主郭（しゅかく）の確認調査を行いました。

主な遺構　主郭は南北長約 30m、東西幅最大 14.7mを測り、南側から約 15mのあたりで北東方向に少し屈曲しています。令和２年度において地表面下より多数の礎石（そせき）を検出、主郭全域に配置されていることが考えられたため、全容把握のため全面的な調査を実施しました。主郭は緩やかな傾斜の尾根を南側でＬ字状に削り、全域を水平に削り出して造成しており、北・東・西側はほぼ垂直に地山を削り切岸が造られています。

礎石は南側に集中して配置されており、北側は南側に比べ残存数は少ないものの、調査前から地表面上に扁平な石材がいくつか散乱していたことから、抜き取られたものと推測されます。礎石は（礎石直下を掘削していないため未確認ではあるが）地山の直上に置かれており、１間間隔で規則的に配置されている場所もあれば、並ばない礎石もみられます。現時点で建物の規模など明らかではありませんが、東西に６間から７間、南北に７間から８間の居館的な建物と推定され、主郭いっぱいに礎石が配置

されていることから１棟以上の建物が建っていたものと推測されます。

主郭北東側に東西に比較的大きな石材を配置し、その中央に 10～30 ㎝前後の石材を敷き並べた石組を検出しました。この場所は南から続く通路状遺構が終わる主郭入口付近にあたり、虎口（こぐち）ではないかと考えられます。

主な遺物　主郭からは土師質（はじしつ）皿（カワラケ）・青磁（せいじ）碗・白磁（はくじ）碗・染付（そめつけ）碗などの土器片が出土しており、概ね 16 世紀中頃から後半に相当すると思われます。また、兜の一部である鍬形状の前立（まえだて）も出土しています。

まとめ　主郭における調査成果は、戦時のための機能を持ちつつ、居住空間としての建物が山上に存在したことを示すものであり、恒常的に使用されていた可能性もあります。かつては山城における建物は大半が小規模な掘立柱建物とされていましたが、近年の発掘調査の成果で守護大名クラスの山城はもとより、石山城跡のような国衆クラスの山城でも礎石建物跡の存在が全国的に確認され、普遍的になりつつあります。令和４年度も調査を継続し、主郭以外の郭の調査や堀切などの調査を進める予定です。

（川嶋清人）

礎　石

礎　石

北側切岸

虎口状遺構

第 37 回　福井県発掘調査報告会資料

― 令和3年度に発掘調査された遺跡 ―

令和4年7月 14 日印刷

令和4年7月 16 日発行

発　行　福井県教育庁埋蔵文化財調査センター